

自分で見た中国 率直な意見交換で理解

日中友好大学生訪中団

日中の大学生が若者らしく交流

(公社)日中友好協会派遣の日中友好大学生訪中団(団長=小野寺喜一郎・協会常務理事)98人が5月14日から20日まで南京、蘇州、上海、北京を訪問し、中国理解を深めて帰国した。中日友好協会が受け入れた。一行は、全国の都道府県協会が推薦した大学生で編成。「南京城壁修復20周年記念行事」に参加し戦争や平和について考えたほか、南京や蘇州の大学を訪れ中国の学生と若者らしく率直に交流した。



グループ討論で交流する日中の学生たち。南京・東南大学で

■ 5月14日

移動日。上海浦東空港から南京への移動は、ほぼ江蘇省を横断する距離。バスで5時間の大移動となった。

■ 5月15日

午前は南京城壁修復協力事業20周年記念式典に参加。式典では、日中双方の学生代表のスピーチが交わされた。全体を通して「歴史を正しく見ることが友好の基礎で



蘇州大学では日中大学生がペアになってキャンパス内を散策した

ある」ということを感じた。

午後は2つに分かれ南京大学と東南大学でそれぞれ学生交流。

東南大学での交流会には同大の日本語学科2年生と3年生が参加。林萍華副学長は留学時代に習得したという日本語を交えながらあいさつし、「東南大学は113年の歴史があり、明代より学府がある。全国第7位の評価で日本の大学との交流

の歴史も長く、特に愛知工業大学との交流が深い。今後もより多くの日本の大学と交流を深めたい」と話した。

■ 5月16日

南京からバスで蘇州へ。午後は蘇州大学を訪問し交流した。陸恵星・蘇州大学国際合作交流所副所長は、「私は1983年に創設された蘇州大学日本語学科の一期生です。国際理解は人の理解。学生交流を通して、将来ために深い中日友好を」と呼びかけた。

交流会では、中国側の学生（1年生のときのカラオケ大会で優勝した張さん）らが日本の歌を披露し、日本側は「世界に一つだけの花」を熱唱。さらに中国側が、日本のテレビドラマ「リーガルハイ」のワンシーンを再現する演劇を披露した。その後は、日中双方の学生がペアになって学内を散策し、自由交流を楽しんだ。

蘇州大学は前身の東呉大学が1900年に創設され、新中国成立後に江蘇師範大学、蘇州大学と名前を変えてきた。春と秋には日本文化祭を催され、日本人教員も在籍し、語学だけでなく茶華道などの文化も幅広く指導しているという。

■ 5月17日

訪中団は、中日友好協会の配慮の下、中国の雄大な古文化と経済・政治の中心地を参観した。まずは蘇州市内の名所である寒山寺（張継の「楓橋夜泊」など様々な詩の題材となったことで有名）を参観し、午後は蘇州から上海に移動。東方明珠に登り、中国経済の中心都市・上海を一望した。



蘇州大学では中国の「学食」を体験した



中国4千年の歴史の象徴「万里の長城」を体験

■5月18日

上海虹橋空港から国内線で北京へ。北京オリンピックの時に建設された巨大なターミナルを持つ首都空港に降り立ち、そのまま、万里の長城へ移動。夜には、王府井を散策する団員もいた。

■5月19日

午前は西太后の夏の離宮である頤和園に。中国が欧米列強に蹂躪される遠因（軍事予算を庭園修復に流用してしまった）ともなった大庭園を参観し、午後は故宮博物院へ。団員たちは一日を通して、清朝末期の歴史を生で見たことになり、その壮大きさに感嘆の声を上げていた。

夜は東長安街の貴賓楼飯店で中日友好協会主催の歓送会が開かれ、中央音楽学院、北京外語大学の学生

も参加した。中国側からは中央音楽学院の学生によるプロ級の歌唱や演奏、そして北京外国語大学の学生による日本のポップ・ソングの披露があり、日本側は kiroro の「未来へ」やゴールデンボンバーの「女々しくて」ほか、ダンスを披露。最後は日中の学生全員で「朋友」を歌い、最後の学生交流にふさわしい締めくくりとなった。



肩を組んで「朋友」を歌う日中の大学生。

中日友好協会主催の歓送会で

■5月20日

帰国。途中パスポートが見当たらなくなるなどのトラブルがあったものの、心配された怪我や病気は出ずに訪中を終えた。出発前の研修会で確認した通り「日本学生の代表」として精一杯交流することができた。

(随行報告 鈴木高啓・岐阜県日中友好協会事務局長)

記録係からの体験レポート

各班の記録係が訪中で感じたことを率直につづってくれた。

息の通った交流、良い経験に

上智大学 3年 遠藤美波

蘇州大学では、日本人参加者一人一人に蘇州大学の大学生がパートナーとして割り振られ、二人一組で蘇州大学を周る、という形で交流が行われた。蘇州大学側の学生は全員日本語学科の学生だったため、日本語が堪能で、日本文化にも興味のある学生ばかりだった。

交流の時間は3時間ほどだったが、それでもキャンパス内を回りきるには時間が足りないほど蘇州大学は広大で、歴史的な建物が立ち並ぶ美しいキャンパスだった。

「日本に行くのが小さい頃からの夢だったの」。私のパートナーは流暢な日本語でこう語り、私に日本に関する様々な質問をしてきた。おすすめの観光地や日本の文化、大学生活など私生活の話だけではなく、政治や日中関係の話についてまで、キャンパス内の小高い丘で、初夏の心地よい風を感じながら様々なことを語り合ったことは、忘れられない思い出だ。日中がもっと仲良くなるにはどうすればいいのか、お互い思いをぶつけあった。

メディアの情報でしか知ることができないお互いの国のことを、今回のような息の通った交流によって知ることができ、参加者にとって非常に良い経験になった。

反日感情を持つ人、少ない

常盤大学 3年 武石幸大

南京大学でのディスカッションでは、一対一のペアになって各自自由に交流を楽しむという形になった。

会話の議題として特に日中対立がテーマとして挙がる事が多かった。南京の学生によると、反日感情を持っているのは昔日本と対立していた世代の人たちや政府の人であって、

今の若い世代はあまり反日感情を持っていないらしい。むしろ日本の漫画など文化の影響で良いイメージを持っている人が多いとのことだ。逆に日本の学生の意見としては、テレビや新聞の影響で中国は反日感情を持っている人が多いと考えていたが、交流してみると反日感情を持っている人は少ないことが分かったようだ。

交流を終えた感想として、中国の学生は1年生でも日本語がかなり上手いと感じた。さらに中国の学生は留学に行く生徒が多いとのことなので、勉学に対する積極性を感じ、自分も語学の勉強を負けてられないと感じた。

日本人と何も変わりはない

桃山学院大学3年 大神 遥平

私は中国の大学生の印象について一番感じたことは「特に日本人と何も変わらない」ということだ。

日本人にもすごく優しい性格をしている人や、ずっと元気な人、よく話をしてくれる人や人見知りの人など色々な人がいる。

中国人もこのような日本人と同じで、色々な性格をした大学生だった。性格面だけでなく、服装にしてもそれぞれの個性があったと思った。

少し感じた日本人と中国人の大学生の違いは、中国人の女の子は化粧をしている人が少ないということだ。そして眼鏡をかけている割合が多かった。その中で数人の女の子が伊達眼鏡をかけていた。女の子にとっては化粧をしない代わりに眼鏡をかけるのが、美意識の高いものなのかなと感じた。

南京城壁 20 周年行事に参加して

福井大学3年 黒田美紗

私は、今回中国に行くにあたって、そのことを中国人の友達に言ったところ、南京は日

本人はあまり行かないほうがいい、危険だから気をつけてということ言われた。正直、南京という街に行くことに不安があった。しかし、南京城壁修復記念式典に参加して、その不安は一気に消えた。私たち日本人を温かく迎えてくれ、日本が南京城壁を修復したことを感謝していると何度もおっしゃっていて、日本人としてとても嬉しくなった。

日本と中国が協力して何かを成し遂げた歴史があることはとても素晴らしいことであるし、かつては協力できる間柄であったのだから、今の日中関係もこんな風に協力して良くなっていくべきだなと思った。南京大学の学生も本当に私たちに優しくしてくれ、南京という街に行って、中国や中国人へのイメージが大きく変わった。

記念式典に参加して、日本人として温かく迎えられ、中国人の学生にも優しくしていただき、やはり、中国は実際に行ってみて、自分の目で見てみないと分からないことがたくさんあると感じた。普通の旅行ではこのような式典参加や大学交流などの貴重な経験はできないので、このプログラムに参加できて本当に良かった。